



interview No.3

Artist TANAKA Shoki



No.3

岐阜県美術館 アートコミュニケーター
～ながラーの
「あの人・この人」インタビュー

今回の
「あの人
・この人」

アーティスト
田中 翔貴さん

THE MUSEUM OF FINE ARTS, Gifu × LINK・MEET × TANAKA Shoki



■今回の「あの人・この人」

アーティスト 田中 翔貴さん

(アーティスト・イン・ミュージアム AiM Vol.10 招へい作家)

田中さんは1989年愛知県生まれ。名古屋芸術大学大学院を修了後、活動拠点を三重県いなべ市に移し、写真技術を応用した作品を制作しています。また、陶作家である秋保久美子さんとのユニット「アトリエ hitotema」として、形地(かたち)染め^{*}による手ぬぐいやハンカチといった染色作品も手掛けています。

*形地染め | 身近な植物を布に挟みたき込むことで、その色や形といったイメージを移し取る手法。田中さんと秋保さんが考案した造語で、“草花が育った土地の風土や空気感をも写し取る”という意味が込められています。



AiM Vol.10



Instagram



Facebook



作品制作を始めたのはいつ頃からですか？

大学2年生頃からです。大学まで美術とは縁がなかったのですが、高校までやっていた野球を腰の故障で辞め、大学に入る時にすごく悩んで。美術の授業は好きだったので、ギリギリで進路を変更して名古屋芸術大学に入りました。そこで印刷の基礎を教わり、写真や版画の分野に触れる機会があって。僕は絵を描くことが苦手でしたが、カメラの、ピント調節ができたり、自分の目の延長のような部分が面白くて、これだったら描けるな、表現ができそうだなって思ったんですね。それがきっかけで写真の制作を始めました。

自分が得意と感じる手段を見つけることによって、表現の可能性が広がるんだなあと思いました。野球に打ち込んでた頃は、やはり短髪（坊主頭？）だったようで、想像すると微笑ましいです。（さく）



表現したいものは変化してきましたか？

そうですね、染色だと、視界に入っている植物は青々しい緑色でも、叩いて液につけると全く違う色に変わったり、同じ植物でも、春と秋で出てくる色味が全然違ったりするんです。植物が持っている色は、肉眼では見えていないものが結構あって。それが見えるようになると、季節ごとの植物の変化が見れることが、特に気になって、なかなか面白くて特殊なんじゃないかなって。だから、写真も染色も、自分たちが見ているものと、現れてくるものが違うっていうのはテーマになってきているかもしれないですね。

普段の生活では見えないものを、田中さんの作品を通して見たり、知ったりできることで、また違った見方や、物事を発見できそうだなあと思いました！（さく）



～ながラーの「あの人・この人」インタビュー

interview
No.3

アーティスト

田中 翔貴さん



今までの作風の変化について教えてください！

最初は絵画にしたくて、カラーで、境界線が無いようなぼやぼやの写真を撮っていました。だんだん写真の意味を考えてはつきり写すようになって、ある時点で、自分で紙に感光剤を刷毛で塗って、好きなサイズに出力することが大事になって。そうすると白黒しかできないんですけど、その刷毛の跡や、感光剤の塗り方とかの工程がどんどん重要になって、写っているものではなく、暗室の中でプリントをした時に現れてくるものが重要になってきたんです。自分が思っているものじゃないものが出てくることにすごく興味があって、現象的な方を追っていったんですね。

いなべ市に移住して、違うことを始めようとした時に、周りに植物がたくさんあって。植物を使用して制作するものとして、植物で布などを染める「草木染め」というものがあるのですが、それをそのままやるのではなく、自分なりの写真的なイメージから、植物をうつしとれないかなって思ったのがきっかけで、植物を使った染色を始めて、試行錯誤をして現在の「形地(かたち)染め」と呼んでいる／

／染色を考えました。形地染めは、植物をダイレクトに叩いて、色をうつして、液体につけて色素を定着させるんですけど、その時に色が変わっていくんです。暗室で行う写真の現像も、光を当てて水で洗うんですけど、工程が似ていて。どちらも化学変化で画面ができるので、すごい共通点があって。なので、いなべに移ってからは、写真と染色を平行して行っていたっていう感じです。

写真と向き合ってきた田中さんの姿勢や、染色と写真の共通点に驚きました！作業中は、どんな画面が現れてくるのか、きっとドキドキするんだろうなと思いました。（さく）

【チチ情報】

インタビューに先立って、アトリエhitotemaに伺いました。自然豊かで、元縫製作業所だった建物も、趣があり素敵でした！四季を通して訪れたいと感じられる場所でした！（さく）





今回チャレンジした新しい技法について教えてください。何かきっかけはありましたか？

先程お話したように、写真と形地染めの工程はとても似ているのですが、今回初めてその二つを合わせるという試みをしています。合わせ方として、最初は撮った写真に全然違う所から持ってきた物を合わせて画面を作る事を考えていたのですが、滞在制作が始まる直前に「同じものがだぶっていたほうがアリティがある」と閃いたんです。写真の中は時間が止まっていますが、写真に写っている植物は、現実では成長したり、変化したり、撮影時にはなかったものが生えていることもあります。成長したり生えてきた、写真とは全く別の時間の植物を、写真の同じ位置に形地染めでのせていくことで、時間の経過、時間のだぶりが表現できると思ったんです。モノクロの背景で手前に色が少し入るので多層的な感じではありますが、“時間”というものが中心にあります。そして、モノクロ写真の印画紙は洗えるので、この方法にぴったりなんです。

きっかけは、初めてのことに戦挑したかったり、岐阜県美術館の自然が使えたり、景色に見えるよう配置する形地染めと写真を／

／合わせたら面白いかもと思ったりと、色々あります。でも、写真の頭で“写す”というイメージでやってきた形地染めを、時間とかそういうものが含まれることで、写真作品として完成させたかったというのが一番かもしれません。

形地染めの“染め”という言葉から、染色の作家と思われることもあるのですが、僕は今まで写真をやってきて、やはり最後は写真にもっていくところで終わらせたかったんです。

写真と重ねられた植物にそんな意図があったなんて！ インタビュー前は写真と形地染めは別物と思っていたのですが、いなべで形地染めを始められたきっかけや、私の質問への答えをお伺いして、改めて写真作家としての田中さんの真摯な思いを感じました。(ゆき)



滞在制作中に観覧者の方と話す機会もあったと思いますが、どうでしたか？

自分のやっている写真作品は一見とっつきにくく、一般の人は見向きもしてくれないこともあるんです。それが今回、会話をしたりしてきっかけがあれば、作品を観て「あーそういう事か」と何か気づいてもらえるということを、目の前で見ることができました。それは、滞在制作ならではなので、集中して作業をしている時以外は、自分から話しかけたりもして、来館者との話を楽しんでいました。

制作を見に来た外国の方のグループに話しかけた時、一緒にいた芸能員の方も交えて、写真を撮るの撮るは“take”だけど、僕のやっていることを英語だと何て表現するんだろうという話になったんです。それで“print”とか“press”も出たのですが、“develop”と言ってくれた人がいて、“develop”は現像するという意味なので、写真的だと理解してくれたのが嬉しく、よく覚えています。

制作中の作家さんとお話をできたら、ついつい色々聞きたくなっちゃいますね♪(ゆき)



【チチ情報】

いつもとは違うところで制作してみるのも良いなと思ったという田中さん。海外での制作にも興味があるようで、「どこで制作してみたいですか？」とお聞きすると迷っていらっしゃいましたが、学生の時に留学していたイギリスのブライトンにまた行きたいそうです！ 留学時は自然を全然見ていなかったので、今度はその自然をよく見て作品を作りたいそうです。(ゆき)



形地染めを行う際の、植物のレイアウトや制作の楽しみについて教えてください。

例えば、手ぬぐいは通常1枚の布を用いて、植物をいろんな場所に挟み制作するので、配置はランダムとなり、どこかにペアがいます。一方で、配置をしっかり決めるときは、布を2枚使って制作するので、同じ配列が2枚に分かれます。今回の作品制作では、植物が“景色”の中で生えているよう、構図を考え配置しています。

試したことのない植物を用いて制作するときは面白い、「何色が出るんだろう」とか、「あーこれ上手くいかなかった」とか、試行錯誤します。思っていなかつた色が出るときがあって、黄色が出るとラッキーです。

形地染めの植物たちが、まるで足元に生えているように見えるのは、配置がよく考えられていているから、その気づかいや雰囲気が伝わってくるんだと思いました。私が購入したハンカチには、黄色に染まった花があります！(かずみん)



手掛けられた手ぬぐいやハンカチに込められた想いを教えてください。

あったかさというか、植物とか目で見ているものを“まとえる”とか“身につけられる”というのは、面白いことだと思ってます。美術作品って、近寄り難かったりするじゃないですか。それが身近なものになっていき、ラフに触ってもらえるとか、知ってもらえる導入になると思っていて、そういう想いで、手ぬぐいやハンカチを作っています。

手ぬぐいを手に取ると柔らかく、身にまとってみると温かさを感じます。また、田中さんの制作している姿が思い浮かびます。アトリエhitotemaとあるように、田中さんのひと手間や人柄が伝わってきて、なんだか幸せな気持ちになります。(かずみん)



■おわりに

今までの歩みや、AiMで新たな表現技法へ挑戦されたお話を伺え、今後の活躍がますます楽しみになりました。オンラインでのインタビューは初の試みでしたが、田中さんのご協力で楽しく行うことができました。田中さん、制作期間のお忙しい中、ありがとうございました！



■インタビュー

アートコミュニケーター「～ながラー」
LINK・MEET丸



アートコミュニケーター
～ながラーとは？



美術館を支える人は、どんな人？何してる人？何を考えている人？知っているようで、意外と知らない、美術館の“なかみ”を、アートコミュニケーター「～ながラー」の舟(チーム)『LINK・MEET丸』が、インタビューを通してリサーチします！

今回は、アーティスト・イン・ミュージアム AiM Vol.10 招へい作家田中翔貴さんに、オンラインでインタビューしました。

* インタビュー実施日：2021年5月16日(日)、22日(土)



～ながラー
チャンネル

[過去のインタビュー
記事はこちら！]